

知床半島のトガリネズミ、ネズミ類の 採集報告—初冬—

前川光司¹・近藤憲久²

¹ 北海道大学歯学部; ² 北海道大学農学部

北海道において、ネズミ類の分布は比較的よく調べられてはいるが、知床半島での報告はほとんどない。又、トガリネズミ類においては北海道の一部の地域（札幌付近と苫小牧）を除いて、その詳しい調査は極めて少ない。それ故、一定の地域を集中的に調査する意義は大きい、特に比較的自然的に残されている知床半島での調査は、知床半島の *fauna* の構造を理解する上で基礎的意味を持っている。

本調査は知床半島の脊椎動物の分布調査の一環として調査継続中のものであるが、これまでにトガリネズミ類、ネズミ類の本地域における分布の報告がない現状にあるので、今後の基礎的な資料とするために、とりあえずその採集結果について報告する。

なお、トガリネズミ類の調査は前川が、ネズミ類の調査は近藤が担当した。

調査時期および方法

調査は昭和54年11月5日～10日に行ったが、この時期は低地でも降雪のみられる時期であり、トガリネズミ類、ネズミ類の個体数や動物相を知るための調査としては少し遅い時期であると言える。調査期間中、11月5日は雨、11月8日には積雪がみられた。

ネズミ類の捕獲はシャーマン型生捕りワナを用いて、約10m 間隔のライントラップ法で行った。ワナ内に餌は入れなかった。捕獲は原則として一地区につき25個のワナを使用して3日間行ったがワナ数の関係上2日間しか行わない地区もあった。各調査地間での生息密度の比較の資料とするため採集したネズミ数は100トラップナイト(TN)当り、すなわち100個のワナを1日使用した時の捕獲数として表わした。

今回行った調査の他に、1979年8月にA地区でネズミ類の調査を行っているので比較のために参

考にした。

ネズミ類の採集と平行して(C、F、G区～後述～は未調査)トガリネズミ類の調査も行った。捕獲は一地区につき原則として10m 間隔で10～25個の墜落函を用いて行った。

採集地として、主要な植生環境と地域を代表するような所を、羅臼側に4ヶ所、斜里側に6ヶ所選定した(図1)。その概要は以下の通りである。

A区——元崎無異の崎無異川に面した海岸段丘林である。クロエゾマツ、シラカバ、エゾイタヤを主体とした林で、うっ閉度は50%、黒色土が発達している。林床植物はミヤコザサ、シダ類、エゾヨモギが優占しているが、植被度は70%である。

B区——羅臼温泉から羅臼市街よりの沢地。ケヤマハンノキ、ヤチダモ、シラカバ主体の林で、うっ閉度は70%である。林床植物はチシマザサ、オオイタドリが優占種であるが、オオイタドリはすでに枯れて、被度は20%である。土壌は礫・粘土である。

C区——羅臼側横断道路の標高440m地点の道路脇。ミズナラ、ダケカンバ林で、周辺部にトドマツ、ナナカマドが見られる。うっ閉度は70%である。林床植物はチシマザサのみであり、被度は100%、地表面にコケが多い。土質は礫・粘土である。

D区——羅臼側横断道路の標高570m地点の道路脇。トドマツ、ハイマツ地帯であり、うっ閉度は70%である。林床植物、土壌ともにC区に類似する。

E区——以久科の原生花園。ハマナス、ツルウメモドキ、エゾノコリンゴが所々に見られる。植物はすべて枯れているが、被度は100%である。土壌は砂である。

F区——原生花園に隣接する海岸防風林。カシワ主体の林にトドマツが混じる。うっ閉度は100%。林床植物はない。土壌は砂質である。

表1. トガリネズミ類およびネズミ類の採集結果

種	類	捕獲数	100TN当り数
A区 元崎無異・海岸段丘林**			
オオアシトガリネズミ		10	
カラフトヒメトガリネズミ		5	16.00 (5.83)
エゾヤチネズミ		12 (7)***	10.67 (3.33)
ミカドネズミ		8 (4)	(0.83)
カラフトアカネズミ		(1)	(6.67)
エゾアカネズミ		(8)	2.67 (1.67)
ヒメネズミ		2 (2)	
B区 羅臼温泉・河畔林			
オオアシトガリネズミ		4	
エゾトガリネズミ		1	
エゾアカネズミ		4	5.33
C区 横断道路 (標高 440m)			
エゾヤチネズミ		3	4.00
ミカドネズミ		1	1.33
エゾアカネズミ		4	5.33
ヒメネズミ		1	1.33
D区 横断道路 (標高 570m)**			
エゾトガリネズミ		1	
カラフトヒメトガリネズミ		1	
エゾヤチネズミ		1	1.33
ヒメネズミ		1	1.33
E区 以久科原生花園			
オオアシトガリネズミ		1	
エゾトガリネズミ		2	
カラフトアカネズミ		3	6.00
F区 以久科防風林			
ミカドネズミ		1	2.00
エゾアカネズミ		2	4.00
カラフトアカネズミ		1	2.00
G区 峰浜防風林**			
エゾヤチネズミ		6	8.00
エゾアカネズミ		3	4.00
H区 遠音別原生林			
オオアシトガリネズミ		3	
エゾトガリネズミ		1	
カラフトヒメトガリネズミ		3	
エゾヤチネズミ		3	4.00
ミカドネズミ		1	1.33
エゾアカネズミ		2	2.67
ヒメネズミ		6	8.00
I区 チャシコツ原野離農地			
トガリネズミ類		0	
ネズミ類		0	0.00
J区 知床五湖ササ地			
オオアシトガリネズミ		1	
カラフトヒメトガリネズミ		1	
エゾヤチネズミ		3	6.00
ヒメネズミ		3	6.00

* 全調査区ともネズミ類はトラップ数は25個、調査日数はE・F・I・Jが2日間、A・B・C・D・G・H区は3日間。

** それぞれイイズナを1頭捕獲した。

*** () 内は1978年8月の採集データ。トラップ数40個×3日間。この時シマリスが1頭捕獲された。

これらは今後の重要な調査課題である。さて、知床半島にはトウキョウトガリネズミ—*S. mimitissimus*—(哺乳類中最も体が小さい種の一つ)が生息している可能性が強い。現に、今回は未調査であるが伊茶仁川周辺で、北大農学部小宮山英重氏が一頭捕獲しており、今後調査地点を増やしていけば生息が確認されようと考えられる。

なお、捕獲個体数の多さによってその個体群の大きさが示されるものではないことを付け加えておきたい。すなわち、トガリネズミの捕獲は天候に作用されることが多いのである。それ故、個体数推定には一層長期の調査が必要であると考えられる。

b. ネズミ類の採集結果

今回の調査は時期的にも遅く、期間も短かったことから十分な資料をうることはできなかったが知床半島のネズミ類の分布の様相は知ることではできた。すなわち、エゾヤチネズミは知床半島部では最も優勢な種であり、今回の調査では全捕獲数の約40%を占めた。本種はB、E、I区では捕獲されなかったが、知床近隣の同環境では捕獲されていることから生息が予想される。ミカドネズミは前種よりは劣勢であるが、A、C、F、H区で捕獲され、道内の他の地域に比して多く捕獲された。エゾアカネズミは森林性の種であり、森林地域では常に捕獲されているが、本種の捕獲には積雪が影響しやすく、正確な傾向は出ていない。カラフトアカネズミは前種とかなりはっきりした棲み分けが認められる種であり、北海道ではE区のような環境で密度が高い。今回はA区(夏)とF区でエゾアカネズミと共に捕獲されたが、隣接して本種の主要な生息地である原生花園や灌木草原があるためと思われる。ヒメネズミは、アカネズミ属では最も小さい種であり、H区のような原生林的景観で優勢である。本種はエゾアカネズミの生息環境にもよく現れるが、C区やJ区のような森林以外の環境にも現れ、アカネズミ属の中では最も生息環境の幅が広い。

今回の調査では2属5種のネズミが捕獲されたが、北海道にはもう一種リシリムクゲネズミが報告されている。この種は大雪山や日高の高山帯で捕獲されていて、知床山系にも生息している可能性がある。もう少し調査地点を増やして検討する

必要がある。